

二松學舎大学人文学会第一〇二回大会 講演題目・研究発表要旨

日時 平成二十二年十一月二十七日（土）  
場所 二松學舎大学九段校舎四〇一教室

講演

二十一世紀に読む夏目漱石

——韓国併合と大逆事件百年の中で——

東京大学大学院総合文化研究科教授

小森 陽一

研究発表

〈国文学〉

小川未明「眠い町」論

——大正三年の文壇・メディア状況の中で——

国文学科四年 深瀬 麻衣

小川未明の「眠い町」は、大正三年五月、大衆少年雑誌『日本少年』に発表された童話である。石坂養平による大正三年の文壇回顧記事に「『底の社会へ』に収められてゐる諸篇やその後に出たもの

は、凡て新主観主義の芸術と称すべきものである」〔『底の社会へ』は大正三年発表の未明の著書〕とあるように、未明は当時数多くの作品を発表し、いわば「新主観主義」の旗手とみなされていたが、作品に対する評価・言及は小説に集中し、童話はほとんどその対象となっていない。

同月発表の小説「鮮血」には多くの評が寄せられているのに対して、「眠い町」の評がほとんど見当たらないことは、こうした事情を端的にしめすが、本発表においては、特に『日本少年』という発表媒体に着目しながら、「眠い町」および未明童話について考察する。

なぜ「眠い町」が評価されてこなかったのかという疑問を起点とし、作品の構造および大正三年という時代状況（または文壇背景）を分析し、作品の文明批判や自然回帰的なコードをふまえながら、最終的には「眠い町」がどのような作品であるかという指標を立てることを目的とする。